

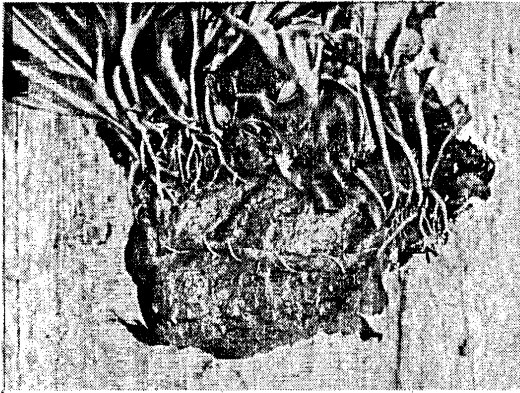
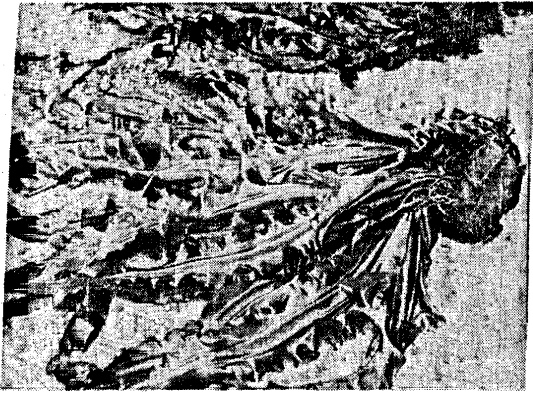
# コンブ投石の一話題

増殖部 川嶋 昭 二

浅海増殖事業の中でコンブの漁場造成は最も大切なもので、漁業者の関心も高いものです。各組合ともブロックや自然石の投入、あるいは岩燻などが盛んに行なわれていますが、これはいわば畠を耕し、雑草をとり除いてコンブの胞子が付きやすいようにしてやる仕事なわけです。しかし胞子がうまく付いてくれるかどうかは全く天然まかせで、このために事業効果が良いとか悪いとかいろいろな話

題が出され、試験場もその確認に追い廻されているわけです。そこで、どうせ投石をするなら種付けをしたブロックなり石なりを使つたらと言う声をあちこちで聞かされ、私たちもその可能性を考えてきましたが、実際には作業の方法や生物的な効果の問題もあつて、これを行なうことはなかなか大変だろうと考え、今までどこでもその試験を行なつてみた組合はありません

んでした。ところが近ごろコンブの養殖が各地で試験されるようになり、これに使う種苗培養も経験が重ねられてきましたので、この技術を何とか応用できないかというようになってきました。根室漁協でも四十年からコンブ養殖テストを行なっておりですが、この人工採苗場でクレモナ糸に採苗して培養した種苗を使って天然石にまきつけ、上に述べたよう、咬生育試験も合せて実施してみました。この試験はまだ充分な結果を得ておりませんが、発表するには早いかも知れませんが、将来はより積極的な増殖方法として利用できるかもしれないという私たちの一つの夢として



種苗糸をまきつけた石に着生、生長した羅臼コンブ (根室、42.4.14写)

読んでほしいと思います、あえて公表するわけです。

◇  
根室漁協がこの試験を行なった目的を簡単に述べますと、湾内の地元産コンブよりも良質な羅臼コンブをこのような方法によつて移植し、改良を計ろうという点にあります。この考え方は生物学的には問題がありそうですが、今はこの点については議論しません。要するに投石材に種苗をつけて投入したらどんな結果になったかという点だけについて報告します。

◇  
これに使った羅臼コンブ(オニコンブ)は

昭和四十年十一月九日に採苗し、その後水槽中で人工培養したうえ、十二月二十四日に石材四十個にまきつけて、根室港内の比較的波の静かな場所に投入したものです。種苗糸(クレモナ糸)は石に直接まきつけないで、まづ中古トワイン(十八匁)にまきつけてからこれを石にからめました。(写真参照)。この時のコンブはまだ肉眼では見えないうぐらいの小さなものでした。このようにして水深五、一六メートルで、附近にコンブやスガモ、ホンダワラ類の生育する海底に沈めたのですが、翌四十一年の夏にこの石をさがしてもなかなか発見できず、遂に一年目は未調査に終りました。これは投入個数が少なかったことと、附近に地元産のコンブやスガモが繁茂して見つけることが困難だったためです。この年はこれでこの試験も終りかと半分あきらめましたが、春に流水が開けて水も澄み、雑草などもまだ大きくならないうちにもう一度さがすこととして約十六カ月が経つてしまいました。

◇  
四十二年四月、解氷と共に船の上からさがして、これらの石をやつと発見しましたので同月十四日にさつそく潜水して、石を二個引き上げました。ここに掲げた写真がその時のものです。コンブは予想以上によく着いており、また生長も天然の地元コンブより良いことが判りました。石はほぼ半分ぐらい砂に埋まっていました。石はほぼ半分ぐらい砂に埋まっていたかと思われ、コンブはすべてこのトワインの上にだけ着生していました。

別表

石材	総本数	総重量 (生g)	全長 (cm)		重量 (g)	
			上段: 平均 下段: 最大 ~ 最小	上段: 平均 下段: 最大 ~ 最小	上段: 平均 下段: 最大 ~ 最小	上段: 平均 下段: 最大 ~ 最小
A	29	5517	140.9 206~31	190.2 372~22		
B	36	3807	101.6 181~29	105.8 290~8		

また、コンブの形を見ますと葉部の外形、特に肩の張り具合や厚さ、茎の長さ太さなどはいづれも羅臼コンブの特徴がかなりよく表われており、地元の湾内コンブと呼ばれるものとは非常に近づきりした差がありました。このような点を総合して考察してみますと、これは人工採苗によつて種付けをしたコンブであることは確実でした。

二個の石に着生したコンブをすべり測定した結果、着生本数は二十九本と三十六本、全長(平均)は一四〇・九cmと一〇一・六cm、重量(平均)は一九〇・二gと一〇五・八gと言ひ結果を得ました。なお最大、最小は別表に掲げたとおりですが、特徴として言えることは着生コンブの中には生長のおくれた短かい葉体が比較的少なく、特に着生本数二十

九本のは、そのうち二十五本までが一〇〇cm以上でした。

根室地先への羅臼コンブの移植には、先号の養殖の問題でも解説したように(本誌第10号参照)また技術的に難しい事柄が残されていて、一応生長はするけれども羅臼地方のよいな良い質の葉体にするのができないのが現状です。このことについてはまた項を改めて解説したいと考えますが、一番大きな問題は二年目の夏を待たないで六月ごろから烈しい末枯れをおこし、葉体が短かくなると言う点にあります。

今ここでお知らせした投石材に着生、生長し

たコンブも、この例にもれず四十二年の夏までには非常に短かくなつて遂に採取するに至りませんでした。しかしはじめにおことわりしたように、とくに角投石材に人工的に種付けした糸をまき付けても、かなりコンブの増殖には役立つと言ひ見通しは得られたわけで、この点では非常に興味のある試験でした。

根室漁協では今年度もこの試験のために種付けした石やブロックを投入しましたが、成果をあげるためには、一步一步問題を解決することが必要だと思ひます。幸いに漁業者の関心も非常に高くてこの作業に全員が参加してくれましたが、このことは私たち調査を受け持つ者にとつて大変な難いことです。